

沖縄的共同性と階層（1）

——排除されるヤンキーの若者たち——

○社会理論・動態研究所 打越 正行

龍谷大学 岸 政彦

大阪市立大学大学院 上原 健太郎

1 目的

現在までの社会学的な沖縄研究では、「沖縄的共同性」は、沖縄社会を理解する鍵として非常に重要視されてきた。それは、地縁や血縁に基づいた伝統的かつインフォーマルなつながりであり、沖縄の人びとを温かく包摂するものである、とされてきた。

だが実際には、人びとの暮らしのなかの「沖縄的共同性」は、ジェンダーや階層によってさまざまに違った姿をみせている。岸政彦・打越正行・上原健太郎の3名によるこの共同調査では、沖縄の共同体の階層ごとのあり方を、インテンシブな質的調査によって明らかにすることが目的とされる。特に本報告では、沖縄の共同体の「外部」に位置づけられるヤンキーの若者たちの視点から、沖縄的共同性について捉えなおす。

2 方法

階層格差の研究は、通常は統計分析を用いた量的調査に基づくことが多いが、本調査では、参与観察と生活史という質的調査法を用いてアプローチした。マクロな構造としての階層格差が、具体的にどのような日常実践によって再生産されているか、そしてそこに沖縄独自の歴史・社会・文化がどのように関係しているのかを、質的・総合的に分析しようとする際には、これらの質的調査が適格的である。参与観察と生活史によって、調査対象者の語りや生活実践、身体に埋め込まれた文化や規範を明らかにしたい。

本調査では、調査対象者を次の3つのサブグループに分け、大量の参与観察のデータと生活史のデータを収集した。すなわち、(1)「安定層＝大卒／公務員・教員・雇用者層」、(2)「中間層＝高卒／自営サービス業層」、(3)「下層・不安定層＝高校中退・中卒／下層労働者層」である。これは沖縄の階層構造のすべてをあらわすものではなく、それぞれがわれわれの予備的調査において浮かび上がってきた、「それぞれの社会経済的地位を代表するグループ」としてのカテゴリ化である。

3 結論

上記の3つの調査対象者のうち、報告者の担当は、下層・不安定層の人びとである。報告者は、沖縄のあるヤンキー集団へ、長年にわたって参与観察を続けている。その結果として、沖縄の下層・不安定層は、単に経済的に厳しいだけでなく、その下位文化やライフスタイルにおいて、きわめて過酷な生活をおくっていることがわかってきた。かれらの暮らしのなかでは、互恵的にみえる「地元つながり」の関係性も、壮絶な暴力と搾取をともなうものになっている。また、家族や親族といった他の共同体的な資源も、かれらの生活の助けとはならない。下層／不安定層の若者たちにとって、沖縄の共同体は必ずしも生活を扶助してくれるものであるわけではなく、むしろかれらはその外部にあって、剥き出しの暴力的な上下関係のなかに縛り付けられているのである。

沖縄の共同体は沖縄社会のすべての人びとをカバーしているわけではなく、そこには階層間格差があり、「共同体から排除される人びと」も存在するのである。